
魔法少女リリカルなのはStrikerS もう一人のストライカー

沙月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers もう一人のストライカー

【Nコード】

N8286X

【作者名】

沙月

【あらすじ】

新暦71年。空港火災に巻き込まれた少女を救ったのは、黒銀の魔導師だった。彼の腕に抱かれて飛んだ空に憧れた少女は、自身ですら忌み嫌っていたその力を僅かながらに受け入れた。

『強くなりたい。この人みたいに！』

4年後、士官学校を卒業した少女を待っていたのは夜天の王とエース・オブ・エース。そして『機動六課』。新人フォワードの一人として、ロングアーチに配属された少女秋月深琴^{あきつきみこ}を待っていたのは

再会と、後にミッドチルダを震撼させる事件の予兆だった。

一方その頃、第97管理外世界「地球」・海鳴市。その夜空を、蒼氷色の杖型デバイスを手にした少女が見つめていた。心と体に傷を負い、親友を失い、それでもなお空への憧れを捨てきれないまま。

いつしか交差する二つの世界で少女たちは出会い、それぞれの願いと未来のため、戦う。

00:プロローグ(前書き)

魔法少女リリカルなのはStrikerSの二次創作小説です。オリキャラが多数登場しますので、苦手な方はご注意ください。

00:プロローグ

新暦71年、4月29日。

燃え盛る炎に覆われた、ミッドチルダ北部臨海第八空港搭乗受付口。ミッドチルダ北部・エルセア行きの飛行機を待っていた私・秋^あ月深^{きつきみ}琴^{こと}も、当然その火災に巻き込まれていた。

「怖いよ……やだよ……」

自力で張った淡紅色のバリアの中で、私は泣くことしかできなかつた。勢いが衰える事の無い炎に、救助のためにやってきた隊員も動くに動けない。先程から姿は見えるものの炎がその行く手を阻んでいる。

熱い、痛い、苦しい、怖い！

張られたバリアも徐々に消え始めた。慣れない状況と長時間の魔法使用からか、魔力の消耗が激しい。

「嫌だよ……こんなの」

涙が溢れて視界を歪ませる。脳裏に過るのは優しかった頃の両親と兄。帰りたい。苦しくても幸せだったあの頃。会いたい。声が聞きたい。今の状況を知れば、きつと助けてくれるはずだから。

「帰り、たいよお……」

魔法なんか使えなくていい。魔法があるから、家族は自分を否定したのだから。

こんな力、欲しくなかったのに。

ピシリ、という音が響く。音の方向　自分の真上を見ると頑丈な屋根に罅が入っていた。

救助隊の人が騒ぎだしたのが聞こえる。

亀裂が大きくなるのを見つめながら、私はぼんやりと考えていた。そして亀裂が達し、大きな瓦礫となった屋根が落ちてくる。バリアの出力を上昇出来るほどの魔力も残っていない。底を尽き始めた魔力はバリアですら維持できなくなっている。

そして、限界は訪れた。魔力が完全に底を尽き、自分を守っていたバリアが消滅する。瓦礫が重力に従って速度を増していった。

あ、死ぬんだ。真っ先にそう思っけれど、体は動かない。

動かなくていい。もう疲れた。私が死んだって誰も悲しまないのに、何必死になってるんだらう……。

そう思って瞳を閉じた、瞬間。

>Circle Protection.<

半球型の銀色のバリアが私を包んだ。そして、機械音声が続く。

>Cross Fire Shoot.<

それと同時に、バリアと同じ銀色の光が砲撃となって瓦礫を飲み込んだ。

「なんとか……間に合ったみたいだな」

言っつて、声の主である男性は降り立つ。真つ赤な炎に煌めく銀の髪と海のように深い青色の瞳をしたその人は私の前に来ると膝を折り、私と視線を合わせた。

「よく頑張ったな。偉いぞ」

バリアを解除して私の頭を撫でたその人は言う。何て答えればいいのか分からないのと口を開く余裕が無い程疲弊した私がただ撫でられていると、彼は私の両脇に手を入れ、そのまま抱き上げた。そして一気に夜空へ飛び出す。

(この人……魔導師なんだ……)

銀の髪によく映える黒の防護服は空隊の物とは違う。じっと見つめていると、それに気付いて優しく微笑んだ彼は、私を落とさないように力強く、それでいて優しく抱きしめた。その温かい腕の中で、私は目に涙を浮かべていた。

「どうかしたか？」

「あ、いえ……」

優しい声で問いかけたその人は、そういえばと通信回線を開く。

「まだ名前を聞いてなかったな。ついでに年と」

「あ、秋月深琴、十歳です」

答えると、回線の向こうから確認作業を行っているらしい女性の声が聞こえた。搭乗者リストとの照会作業を行っていたようだ。その作業が終わったことを確認して、男性は通信回線を閉じる。

「搭乗手続きをしていたみたいたが、家族は一緒じゃないのか？」

「いえ、一人です……今日、管理外世界から渡航してきたばかりで……」

一瞬だけ訝しむような目をしたその人は、付け加えた言葉に小さく頷いた。

「管理外世界からの渡航ということは、魔導師志望か？」

「今はまだ……さっきの魔法も、無我夢中でしたし」

飛行機が爆発して、炎が燃え広がって、たくさんの悲鳴が響いて

怖くて、死にたくないって思いでいっぱいになった。

ただそれだけで、私はあのバリアを張っていた。どういう展開方法だったかも分からない。

そもそも『魔導師』という存在を知ったのは一週間ほど前で、自分にその才能があるかどうかも分かっていない。

「そうは思えないけどな」

「えっ……」

前方を見据えながら、その人は続ける。

「確かに粗削りだとは思いますが、筋はいいんじゃないか？ 教官資格を持っていない俺が言うのも何だが……少なくとも、俺より才能は

あるだろう」

自嘲するような笑みを浮かべて、その人は言った。

「騙されたと思ってやってみるといい。理由はどうあれ、せつかくここに来たんだ。全部自分のせいだと思い込むなよ」

そう言い切って、その人はゆつくりと降下していく。待機していた医務官に私を引き渡して、また空を飛んでいった。病院に搬送される最中、私は先程の言葉を思い出していた。あの人は私に才能があると言っていた。家族に嫌われ、自分も嫌っていたこの力を、あの人は認めてくれた。

そう考えたら、乾いていたはずの涙が浮かんできた。

もし、本当に私に才能があるのなら。

あの人のようになりたい。あの人のように強くなりたい。あの人のように優しく、誰かを助けられるほどの力が欲しい。例え先程の言葉が、私を慰めるだけの嘘だったとしても。

変わりたい。泣いてるだけの自分を終わりにしたい。

守られるだけの自分なんか、終わりにするんだ！

先程まで考えていたこととは正反対の願いを、この瞬間には抱いていた。

そしてこの出会いが、後の私に関わることなど知らぬまま。

私は、両手をそっと握りしめていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8286x/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS もう一人のストライカー

2011年11月11日05時53分発行